

# 昔語りの青木さんを

## (旧)山古志村・種芋原に訪ねて

たねすはら

河合靖久

### はじめに

きっかけは、偶然手にした「聞いてくらししゃい語りつくし越後の昔話」(長岡民話の会)の案内でした。そのトップに種芋原小学校(四十年前―四年間)で一緒に緒した元同僚・青木ノブさんが載っていたのです。

青木先生は、大正十二年生まれで、退職後も地元の小学校などで、子どもたちに昔話を語りました。教職の傍ら新潟県の民話採集者として精力的に山里を巡った水澤謙一さんも、青木さん宅を訪れたそうです。水澤さんは、「とんと昔があつたげど」第二集(昭和三三年発行)の序で古志郡二十村郷の昔話採集に触れて述べています。虫亀・蓬平・竹沢などの地名に混じって

種芋原の語り部も数名載っております。生活に直結した昔話や方言の解説もありました。

### 一、昔話と青木ノブさんの出会い

ノブさんは家の都合で、かわいがられた実家のおばあちゃんと小学校四年生まで、過ごしたそうです。

「夜、床に入って寝るときになると、「あつたてんがな(の)〜と、おばあちゃんからたつぷり毎晩のように聞いて育ったそうです。

長岡民話の会の安部昌江さんにお伺いすると長岡地域の昔話は、「とんとむかしがあつたてんがな〜」、「いきがぼーんとさけた」の形が多いそうです。

初めの言葉は、「あつたてんがの〜」で始めること

が多く、たまに「とんとん」を付けることもあるとか…。  
聴き手の子どもに合わせた「自在さ」が覗えます。

終わり(語り納め)の言葉も正式には「いちごさヶえもーした」「あまざけわいたらのんでくりやれ」「つけながしよんだら、かんでくりやれ」「なべのした、がくらがら」で終わるのだそうです(\*文字表記は一部不正確…)。

私は、「越後、栄えた」と思っていました。が、「甘酒や漬け菜、鍋の下」を直接伺うのは初めてでした。

「二期栄え申した」は、その家の身代が長く栄えて、めでたい、めでたい…の意味だそうです。

ノブさんの子どもの頃は、「おっきなイチゴの木があつて、裂けてしまった」と考えていたそうです。

「甘酒湧いた」から、地域の祭礼を想像する採話者もおります。私には、囲炉裏の周りにちよこんと座った子どもたちが、真ん中の自在鉤に吊された鍋の中の甘酒が温まるのを首を長くして待っている姿を想像します。「漬け菜…」では、普段の近所での茶飲み風景などが想起されます。「しよんだら」は、「漬かったら」の意味です。「鍋の下がーらがら」については、「鍋の底が見えるまで、お客さまを歓待…」の意味も

他で聞きましたが、鍋を底まで綺麗に洗って鼠が出るのを防ぐと教えてくださいました。

ノブさんは、自分の昔話を、方言がものすごく入っているから、みなさんに分からないのではないかと、「かえる」を「ぎやく」と言っし…、「ごつつお」や、「つあつあ」なんてわかるるか…などと、謙遜されませんが、幼い頃の語りを純粹に伝えておられるだけに、原石の輝き・魅力を持つておられます。

自身も語り手で、長岡民話の会顧問、日本昔話学会会員の高橋実(作家・小国在住)さんも「方言のそのままがいい…」とノブさんの貴重さを評価されています。最近はずぐに思い出せない話もあるが、百話以上の語りができるそうで、先日ご自宅に訪れた民話サークルの四名の女性に三〇話ほど語ったそうです。

ノブさんの幼少期に浸った昔話は、大切なおばあちゃんと思い出と一緒に保存・封印されたタイムカプセルのようなものを感じました。

民話や昔話の採集や研究は、民俗学の柳田国男さんが先達と聞いており、前出の水澤さんの著書は『古志郡二十村郷昔話集』(昭和五五年)など多数の出版があります。わらべ唄を中心に採集・採譜されておられる山

古志出身の峰村辰典さんも、ご近所に在住です。

今は、地域に固有の文化と、生きた言葉が大切にされつつあり、身近な生活と結びついた文化活動として、この分野にも老人パワーの意欲的なねばり強さが期待されているのかもしれない。

戦後の一時期「方言追放運動」が強調されましたが、暮らしている周りの「自然」や、「生活や土の匂い」を伝える方言の魅力について改めて考えました。

このように貴重な資料を掘り起こして保存、研究する地道な活動の積み重ねは大事です。自分自身の考え方や感じ方、生き方を探り、心の豊かさに迫る意義は大きいと思いました。

## 二、女子師範学校と長岡空襲のことなど

青木ノブさんは、種芋原で生まれ育ち、昭和十九年に長岡の女子師範学校を卒業し、蓬平小学校に一年、途中の休職や池谷小学校での六年間の勤めもあったが、地元の種芋原小の先生がずーっと、長かったそうです。教師となった翌二十年(終戦の年)の八月一日には、長岡空襲を萱峠かやの上で火の海の街を見て「かわいそうだね〜かわいそうだね〜」と、言い合ったが「どうして

みようがなかった…」そうです。

女子師範での校則や生活は、とても厳しくて、夏の夕方日赤病院に父親を見舞い、五時半の寮の点呼に二〜三分遅れて「始末書」を提出させられたそうです。寮の生活は、理由の如何を問わず「始末書三枚」で退学処分という厳しさだったそうです。

「私が教えたのはほとんど村の子です。だからすぐ何々さんと子どもたちの時の名前が出てきて…、お父さんやお母さんになつているのに…。今でも、教え子がいっぱいいて…おかしがつて付き合つていられて…幸せです」とノブさんは話されました。

村内の子どもが少なくなつて「子どもの声が聞こえないと、さびしい」と、ノブさんの言葉です。

## 三、山古志の闘牛や産業・地域復興のこと

娘の頃のノブさんが見たという山古志の「角突き」は、私が北魚・川口小に転勤した年の昭和四十七年、木籠・松井治二さんを中心に村人たちの熱意で復活され、重要無形民俗文化財の指定も受け現在に至るそうです。最近「文の林」(別冊、牛の角突き街道をゆく・長岡地域振興局発行)で教えられたことですが、出奔(出家)

前、名主見習いの良寛さん（出雲崎）が、闘牛を見物して漢詩「虫亀看牛闘」（虫亀は旧字）に詠んでいました。

「北越雪譜」の著者、鈴木牧之の闘牛に関する文や絵も、滝沢馬琴「南総里見八犬伝」に使われています。実際の角のぶつかり合いとその目の迫力は、時代を超えた娯楽である事が容易に想像できます。

勝負の決着をつけずに引き分けることも特色の一つです。闘う牛の身体と心を、最後まで痛めつけない配慮と共に、勝ち負けの「わだかまり」を関係者に残さないための工夫は、雪国・越後人に特有の「暮らしの知恵」をも感じさせます。

神前に奉納するという古式を保ち「賭け事」にしない健全性や、飼い主たちの牛にかける情熱や愛情、毎日の世話・手入れ、かわいがり方にも驚かされます。

山古志は、棚田の景観も有名ですが、棚田を利用した錦鯉の養殖も盛んです。岩崎京子さんの童話「鯉のいる村」の舞台、映画「掘るまいか」の中山手堀りトンネル、「山古志村のマリと三匹の子犬」の映画などで全国にも知られました。

この地の成り立ちと産業は、前掲「文の林」巻頭で

中野雅子（自然環境調査員）さんは、「地すべり、そして豪雪。これが、二十村郷という生活の場と棚田を生んだ。そしてここから、牛の角突き、錦鯉、手掘り隧道といった特色ある文化がはぐくまれて…」と、簡潔にまとめています。

山古志の大地は、五百万年以前の海底の沈殿物が主体で、滑って緩やかになった斜面に、棚田を築き、農作業に使った足腰の強い牛が、角突きのルーツになった。水を求める横井戸掘りの技術は、中山隧道に生かされ、地下水を温める棚田の溜め池に鯉を放った。

おいしい米や錦鯉の発色の鮮やかさは、海底微量沈殿物とも聞きました。ノブさんの昔話も、その特色ある文化の一部を受け持っているのではないのでしょうか。車中心の現代では想像し難いですが、昔の山古志は、越後の古称「古志」を名に留め、種芋原には、古代の越後上布の原料「芋」<sup>カウチ</sup>を地名に残します。

「徒歩の時代」には、長岡・小千谷・栃尾・魚沼の各方面に峠道で繋がる陸路の要衝・中心地でした。

萱峠は、条件が整うと弥彦・角田山、佐渡まで見えます。冬に海の方から吹き上げてきた風が、振り向くと集落に雪になって降る光景も懐かしい思い出です。

ノブさんは、平成十六年十月二十三日の中越地震直後の全村ヘリコプターで避難の二年後、ご主人のふるさとへの強い想いを大切に種芋原に帰られました。

旧山古志の村民は、「七割以上の住民が帰村」(当時の山古志村企画課長・青木勝さん談)で、中越地震で壊された自然と集落・地域力は、現在回復途中です。

この地域の特徴は、子どもたちが、校外学習やマラソンなどで住民と出会えば声を掛け合える、互いに知り合った間柄で、それが強みとも言えます。

「地域に子どもたちがいなくなれば、学校は消滅する」とは、福島大学の境野健児先生の言葉ですが、国土の保全や自然環境の保護、中山間地の役割の再認識は、子どもを産み育てる環境・地域と一体です。

大地震からの復興と自然と穏やかな生活の回復を願う、ノブさんとの再会を約し、四十数年前の自分に戻って帰路につきました。

(かわい やすひさ・所員)

## 国際教養大学、秋田市に開学5年目

中央教育審議会長だった中嶋嶺雄氏が学長に公立法人国際教養大学が設立(04年)して二回の卒業生を出した。本邦初の地方独立、単科大学で就職はこの厳しい時代にもかかわらず、極めて好調という。ユニークな大学で、すべての授業は英語で行う。従ってTOEFL(英語学力検定)五五〇点以上の力がないと入学はムリ。そのうえ世界中に提携大学があり一年間の海外留学を義務づけている。その留学は、黙って講義を聴いても卒業できる日本の大学と違い、積極的な質疑討論が日常になり、友情も強固に。人格も能力も飛躍的に向上させる。全校555人(男178・女377)の各学年に多数の海外からの留学生もいる。全寮制である。

中嶋学長は日本の大学は世界の趨勢に負けると、危機感を持ち教養大学を秋田県と共に創った。十八歳の多感な時、旧制高等学校が育てたような教養をこそ身につけるべきとした。教養を軽視し、早く専門を学ばせる、日本の大学は虻蜂取らずに終わると。また全寮制の利点を最大限に生かしているという。本県の県立大学が四月(09年)から開学した。どう育つか注目したい。

(T)